

探求・川にちなんだ万葉集の歌

# 万葉の川心 第一回

業務部 舩田 園子

## 利根川の川瀬も知らずただ渡り

### 波にあふのす逢へる君かも

(巻第十四「東歌」三四三番歌)

出会い。老若様々、色とりどりの出会いのなか、人生には自分自身を根底から揺るがすような出会いがある。ふり返ると、あの時あの出会いがなかったら、自分はどうなっていたらうかという人が心に浮かんでくる。しかし一番衝撃的な出会いとなれば、やはり恋しい方との出会いであらうか。東歌、巻第十四における恋歌の中ではその感動を利根川に寄せている。

この歌の言いたいことはただ一つ、「逢へる君かも」(あなたに会った驚き)なのである。その出会い方のたとえを、万葉人は川の流れに託した。利根川の浅瀬をよく知らずにずんずん渡って、突然の深みに「あつ」と思う間もなく波をかぶってしまった、あの一瞬の戸惑いと驚きが、そのまま「あなたに会った」驚きに重ね合わされていく。心で感じる世界が、体で感じる水によって導かれる。万葉のこの時代、すでに、「川瀬を知らずに川を渡ることは無謀である」ということわざが、人々の間に浸透していたというから、生活のすぐそばに川があり、恋の舞台や口説き文句にも使われたと思われる。

この歌の解釈には二説ある。ひとつはまがたら若い娘が、男性からの告白に「ただただ驚いています」と返した歌という説。もう一つは男性が、「会いたい会いたいと思いつけて闇雲に進むうち、思いがけなくあなたに会えた」という説である。元来東歌には、これと代表される詠み手もなく、おそらくは女たちの集団労働の場で口々に歌われ、流行ったものであるら

しい。川を渡る苦労とともに、「川瀬を知らずに川を渡るような強引さて愛されたい」——そんな乙女の願望が含まれて、都歌にはない生活の匂いが、万葉集に新鮮な部立として選ばれている。また、解釈の二説は、どちらが正しいというよりも、男女どちらともに読み取れることがおもしろい。あまりにストレートな表現のために、いろいろな取り方ができるのである。一方で、言葉を練って技巧を重ねた新古今和歌集などを好む人になれば、物足りないといわれるかもしれない。

この歌は上野国(今の群馬県)の相聞の歌(贈答歌)であるが、多くの支川をもつ利根川の岸辺では、古くから川とともに生活があり、水とふれあつた心が流れているようである。

